

日本文化私観

坂口安吾

内容理解

この文章で筆者は、心ひかれる建物や軍艦や運動選手の姿から、日本文化を見つめ直そうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇小菅刑務所 取手から上野まで三つの川を越える、その一つの川岸に小菅刑務所がある。この大建築物には一箇所の美的 ¹ といふものもなく、刑務所然としており、刑務所以外の何物でもありえない構えなのだが、不思議に心を引かれる眺めである。それは刑務所の観念と結び付き、その威圧的なもので僕の心に迫るのとは様子が違う。むしろ懐かしい気持ちである。つまりは、結局、どこかしら、その美しさで僕の心をひいているのだ。いつたい、ほんとに美しいのかしら、と、僕は時々考えた。

◇ドライアイス工場 銀座から築地へ歩き、渡し船に乗り、佃島へ渡ることが、よく、あった。渡し船を降りると、突然遠い旅に來たような気持になる。こんな旅の感じが好きでもあったが、一つには、聖路加病院の近所にドライアイスの工場があつて、これが奇妙に僕の心を引くのであった。工場地帯では変哲もない建物であるかも知れぬ。ここにも一切の美的考慮というものがなく、ただ ² に応じた設備だけで一つの建築が成り立っている。町屋の中でこれを見ると、魁偉であり、異観であつたが、しかし、ずぬけて美しいことがわかるのだつた。この工場は僕の胸に食い入り、はるか郷愁に続いていくおおらかな ³ があつた。

法隆寺や平等院の美しさには、どこかしら物足りなさを補わなければ、納得することができないうのだが、小菅刑務所とドライアイス工場の二つは、もつと直接突き当たり、補う何物もなく、僕の心をすぐ ⁴ へ導いていく力があつた。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

威圧 (三九八・三)

変哲 (三九九・四)

終始一貫 (四〇一・九)

代物 (四〇三・三)

◇帝国海軍無敵駆逐艦 小さな入江の中に休んでいた、何か謙虚な感じをさせる軍艦の美しさが、僕の心を揺り動かしした。水に浮かぶ黒い⁵な鉄塊を飽かず眺め続けた。

この三つのものが、なぜ、かくも美しいか。ただ、必要ということだ。どのような旧来の⁶も、この必要やむべからざる生成を阻む力とはなりえなかった。

◇文学 美は、特に美を意識してなされたところからは生まれてこない。終始一貫「必要」のみ。「やむべからざる実質」が求めたところの独自の形態が、美を生む。これが散文の精神であり、小説の真骨頂であり、あらゆる⁷の大道なのだ。問題は、真に必要なことが、汝の独自の手により、⁸なる物を取り去り、真に適切に表現されているかどうか、ということだ。

◇オウエンス・イー十六戦闘機 疾走するオウエンスの動きには、必要に応じた完全なる動きの美しさがある。ずんぐり太ったイー十六戦闘機の速力的な美しさ。見たところのスマートさだけでは、真に美なる物とはなりえない。全ては、実質の問題だ。

われわれの生活が健康である限り、西洋風のバラックを模倣して得々としても、われわれの文化は健康だ。われわれの伝統も、⁹だ。真に生活する限り、猿まねを恥じることはない。それが¹⁰の生活である限り、猿まねにも、独創と同一の優越がある。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまとめてみよう。
〈指定語——美しさ・必要・文化〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

- ・現代の日本では、「必要」の美しさを感じさせる建造物には、どのようなものがあるか。
- ・日本海軍の駆逐艦とは、どのような軍艦であつたか。

- ・ベルリンオリンピックでは、選手の美しさはどのように扱われたか。

100